
古国の末姫と加護持ちの王

空月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

古国の末姫と加護持ちの王

【Nコード】

N3773X

【作者名】

空月

【あらすじ】

古国イースヒヤンデの末姫であるリルは、誕生祝いに兄たちからもらったプレゼントのせいで、海向こうの大陸にある砂漠『アズイ・アシーク』に飛ばされてしまう。そこに倒れていた少年を助けてみれば、彼は『魔法大国』シャラ・シャハルの王だった。ただし、リルが知るより格段に幼い姿の。

そして彼女は知る。王位を継ぐはずはないと誰もが思っていたにも関わらず、【加護印】持ちの王、アル＝ラシード・リユーン・シャ

ン」シャハラが誕生したその理由を。

不本意ながら訪れることになった砂漠で出会った（拾った）相手
が他国の王様（予定）だったために、知られざる過去の王位争いの
一端に巻き込まれる女の子の話。三人称で進みます。主人公設定上、
ハラハラドキドキはあんまりないかもしれません。

闇と月光

月光に照らされた男の顔は、喜色に彩られていた。

「ああ、長かった……」

万感をこめて呟く。

「何十年も耐え続けてきたような気がするが 実際には十年足らずか。我は存外堪え性のない人間だったのかもしれない」

自らの足元に転がる人物の顔を覗き込む。これから自分に起こることを知らぬが故の無垢な寝顔に、歪んだ笑みを浮かべた。

「お前自身に非はない。罪もない。それは知っている だが我にとって、お前の存在は邪魔以外の何物でもないのだ。言ってしまうば、お前の存在そのものが、罪と言えよう」

そつと、その額に浮かぶ【加護印^{シャーン}】に指を這わせる。憎く、疎ましく、目障りで 羨望と嫉妬を抱かせる、その印。

「その印さえなければ、もっと長く生きられただろうに」

…… かわいそうな、我が弟よ。

囁いて、男は手筈を整えるため、その場を離れたのだった。

気付けば砂漠

青と、金。

それが初めにリルが認識したものだった。

「……………」

ぐるりと周囲を見回して、絶句する。

見渡す限り広がる、金の砂が広がる大地。抜けるような青空。建物どころか影すら見えない。

太陽がじりじりと肌を灼く。とりあえず装飾の薄布を解いて、頭に被った。多分ないよりはましだ。

「ええと……………」

もう一度辺りを見回してみる。何度か瞬きを試みたものの、景色は変わらなかった。ついではかりに頬を抓ってみても、鮮明な痛みはこれが現実だということしか伝えてこない。

リルはあまりのことに頭を抱えしゃがみこみそうになって、寸前でそれをやめた。

（………… 予想外のことが起きたときは、まず状況把握に努めるべきだ……… っっていつもザード兄様が言ってるし）

深呼吸を繰り返して、自分を落ち着かせる。そうして三度周囲^{みたび}を確認した。見渡す限りの金色の砂丘は、遮るもののない太陽光に照らされて、痛いほどに存在を主張している。

しかし、リルの住まう国、その周辺、もつと言えば大陸に 砂漠は、ない。

そもそもリルは、この砂漠を認識する直前まで、自分の部屋にいたのだ。なのに屋外であることからしておかしい。

これが夢でないと仮定するのなら、考えられる原因はひとつ。

超常的な力が、この状況を作り出したのだ。

リルは少し考え、右腕の腕輪に触れる。中央に嵌められている赤の精霊石^{イス}を定められた通りに叩き、思念でもって呼びかける。

（イス・ナアルⅡ【焰】、緊急事態なの、出てきて）

数秒の間があつて、精霊石^{イス}が明滅した。精霊石^{イス}から赤い光が飛び出て、宙に浮かんだかと思うと発火する。炎はみるみる勢いを増し、人の背丈ほどに膨れ上がったと同時に、唐突に消えた。そこに人影を残して。

それは、リルより頭一つ分ほど背の高い、男の姿をしていた。少年というには老成した雰囲気、青年と呼ぶには幼さの残る体つきの、年齢不詳というのがしっくりくる風貌。浅黒い肌、炎のように赤い髪は後ろで束ねられ、赤みの強い金の瞳が焦ったようにリルを映す。

「姫さん、なに、敵！？ 暴漢！？」

勢い込んで訊いて来た男はしかし、この空間に害意が感じられないことに気付いて目を瞬いた。そして慌てて周囲を見回し、自分達以外に意思ある生物が存在しないことを確認して、がっくりと肩を落とす。

「あーびつくりしたー。姫さんが『緊急事態』なんて言うつの滅多にないから、なんかすごいヤバい状況にでもなったのかと……」

『寿命縮まったって絶対』と零す男に苦笑を漏らし、リルは口を開く。

「誤解させたみたいでごめんね、焰。でも、『すごいヤバい状況』かもしれないから出てきてもらったの。わたしだけじゃ判断出来なくて……」

「？ 判断って、何の」

言いかけた男は、何か思い当たることがあつたらしく目を見開いた。それにリルは苦笑を深める。

「ここ、何処か、わかる？」

男は空を見、地面を見、さらに四方を見回して 最後に、何やら宙に円を描いた。その軌跡に一瞬炎が灯るが、すぐに押しつぶされたように消える。

「……【禁智帯】 アズイ・アシークだな、間違いなく」
「やつぱり……」

「少なくとも俺は、精霊イサーがうまく力が揮えなくなる場所を、他に知らない」

「それにどこからどう見ても砂漠だし、ね」

アズイ・アシーク 【禁智帯】の一つであるその場所は、ありとあらゆる魔術的要素が拒絶され、その影響で砂漠化していると言われている。それはその一帯に、『外的魔力』が存在しないからだ。『外的魔力』は『魔術』や『魔法』を使う際に必要であり、また、

この世界の均衡を保つ役割をも果たしている。故に『外的魔力』の存在しない【禁智帯】は均衡が崩れ、一面の砂漠や永久凍土の地、といったふうに、生命の育たない場所となるのだ。

「……で、ここが【禁智帯】のアズイ・アシークだろうってのはともかくとして、なんでまたこんなところに居るんだ？ 俺が精霊石^{イース}の中戻る前はイース^{国内}ヒヤンデに居たよな。アズイ・アシークがあるのって海挟んだ向こう側の大陸じゃなかったか？」

「それが、わたしにもよくわからなくて」

「へ？」

困ったように眉根を寄せたリルは、溜息をついて話し出す。

「……実はわたし、今日十五歳になったんだけど」

「え、マジか。俺聞いてないぞ！？ 贈り物も用意してないし！」

「言っていないもの。っていうか気にしないでいいから。……それで、兄様達が、それぞれプレゼントをくれたの」

「兄様達って……ファレンとかセクトとかザードとかシーズのことだよな？」

「それ以外にわたしに兄様と呼べる人はいないってば。なんていうか、状況からして、そのプレゼントが問題だったみたいなんだけど」

言いながらリルは思い返す。

最初にリルにプレゼントを渡しに来たのは、三番目の兄であるザードだった。

いつものように満面の笑顔で、ついでに言えば飛びつかんばかりの勢いで、『誕生日おめでとうリル！』と朝一番に部屋に飛び込んできたのだ。

……寝起きにあの元気すぎる声は響いた……とちよつと遠い目になる。

次にリルの元を訪れたのは、四番目の兄、そしてザードの双子の弟でもあるシーズだった。

ザードと違って、自分の興味のあること以外には必要最低限以下の語数しか口にしないシーズは、ふらりと許可もなく部屋に入ってきた。そして何事かと目を瞬かせるリルの目の前に包まれてもいない素のままのプレゼントを落とし、すんでのところで受け取った様を見ることもなく、またふらりと出て行ったのだ。

ザードが先に来ていなかったら誕生日祝いだということすら気付かなかっただろう。それほどに『祝う』という雰囲気からかけ離れていた。

そして次にリルにプレゼントを渡したのは、一番上の兄であるフアレンドだった。

いつも通り、自主鍛錬中のフアレンに休憩ついでの昼食を持っていった際、『ああそうだった忘れるところだった』という言葉と共に何気なく渡されたのだ。シーズとの違いは、きちんとプレゼント用に包装されていたところである。

……まあ、鍛錬中も持っていたせいなのか、少々、いや大分よれてしまっていたが。

最後にプレゼントを渡してきたのは、二番目の兄であるセクトだった。

恒例となっている勉強会　　と言つてもリルが一方的にセクトに教わっているだけなのだが　　の前に、『誕生日おめでとう。今年もリルの誕生を祝えて嬉しいよ』と微笑みながら差し出されたのだ。病弱ゆえ儂げな見た目とは相反した気の強さにより、辛辣と言つても過言ではない普段からはかけ離れた態度に、毎年首を傾げるこ

ととなるのだが 果たして何故そんな態度なのかは今回もわからなかった。

……ともかく、四人から渡されたプレゼントの中身を確認してみたところ、すべて装飾具だった。

ザードが指輪、シーズが足飾り、ファレンが首飾り、セクトが耳飾り という、示し合わせたかのような取り合わせ。しかしザードを始め誰もそれらしきことを口にしなかったので、それはないだろう、とリルは思ったのだが。

驚くべきことに、その装飾具に使われている飾り石が すべて同じ種類だったのだ。

しかも、リルの知らない石だった。セクトとの勉強やザードの旅の土産やシーズの実験等々で様々な石を見てきた己の知識にない石。何の石だろう、と気になって、調べようとそれらを手に図書室へ向かおうとした 次の瞬間に、リルはこの砂漠に立っていた。

だから恐らく、この事象の原因はそのプレゼントなのだろうと思うのだが……何故か、今それはリルの手元にない。しっかりと手に持っていたはずなのに。

こんなことになるのなら先に誰かに訊いてみればよかった、と思っても後悔先に立たず。誰かに聞くより先に調べる癖がついてしまっていたのだから仕方がない。

それに、焰に訊いていたところで、この現象を回避できていたかというのはわからないのだし。

事情をかいつまんで説明したリルは、どこか考え込む風な焰をじっと見つめる。

焰は「あー」とか「うー」とか言いながら頭を掻いている。そして意を決したように話し出した。

【禁智帯】と『間隙』

「あー……多分それ、【移空石】だったんだろ」

「【移空石】？」

「空間を渡る力が込められた石っていうか、空間転移装置みたいなもん。まだ精霊イサーがごろごろしてた頃に作られたんだよ。でも随分と前から見なくなつて、てつきり使えるやつはもうなくなつたのかと思つてたんだけど……まさか姫さんの元に来ちゃうとはなー」

あちゃー、とでも言いたげなその口調に、リルは首を傾げた。その言い方はまるで、リルの元に【移空石】が来ると都合が悪いかのようだ。

「その……【移空石】って、わたしが持つとまずいものだったの？」

「ああ、いや、そういうわけじゃないんだけど。姫さんがつかうか、姫さんと俺が一緒だったのがまずかつたっていうか」

「わたしと、焰？」

「そ。正確には精霊石イースと契約者。【移空石】ってのは元々魔術師が作つてたものだからさ。使えるのも基本魔術師。でも精霊石イース持ち

つつーか精霊イサーにも使えんの。精霊石イース持ちを通じてだけ。でもほ

ら姫さん、『魔力因子』ないだろ？ 『発現因子』だけで。だから

俺の力と相俟つて半端に作動しちまつたんじゃないかなー、と」

ま、憶測だけど、と締めくくつて、焰は空を見上げた。そこには相変わらず凶悪な日差しを降り注がせている太陽の姿。

「とりあえず姫さん、移動したら？ 俺はともかく、姫さん生身の

人間だし。なんだっけ、なんか安全なところあるんだろ？ アズイ・アシックにもさ」

言われて、リルは頷く。

「あ、うん。シーズ兄様がガード兄様に調べさせたから えっと、多分こつち」

シーズに頼まれて、ガードの言葉を元に地図を描き起こしたのは、そう昔のことではない。完璧に、とは言わないが、大まかな位置は覚えている。

通常目印になるようなものはここにはないが、位置による砂丘の形状の見分け方もガードに教わっていたため問題ない。

それを、シーズは『間隙』と呼んでいた。均衡が崩れているが故に生じた、世界のズレ 事象の間隙。捻りも何もあつたものではない名称ではあるが、その本質を的確に表しているとも言える。

記憶を頼りに移動し始めたリルの後ろを、焔がのんびりについていく。

そして、搜索を始めてそれほど経たず、それは見つかった。

「……あつた！」

思わず喜色の混じった声をあげて、リルは『間隙』へと足を踏み入れた。

『間隙』は、本来あらわれるべき現象が正常にあらわれない場所である。つまりこのアズイ・アシックの場合 。

「はあ、涼しい……」

周りとなんの変わりもない砂漠の真っ只中でありながら、直射日光の熱も、周囲の熱気も届かない、暑くも涼しくもない場所となるのだった。

先程まで周囲が凶悪なまでに暑かったため、体感的には涼しく感じる。生命の危機を感じるほどでなくとも、それなりに茹だつてきていたリルは、ちよつとばかり生き返る心地だった。焰は精霊^{イサー}であるため、大して影響はない。

「ふーん、『間隙』ってこんななんなのか。『外側』ってわけでもなく、かといって『内側』でもない　確かに『間隙』だな、これは」

何やら納得して頷いている焰をよそに、リルはぼんやりと今後のことには思いを馳せる。

焰曰く【移空石】によってここに来てしまったらしいが、その【移空石】は手元がない。ということはつまり、移動手段は徒歩しかない。

さらに、ここはアズィ・アシーク　【禁智帯】だ。魔法も魔術も使えない。そもそもリルはどちらも使えないのだが。

精霊^{イサー}である焰は魔術や魔法とは微妙に違う力を使うが、それでも【禁智帯】ではうまくそれを揮えない。『外的魔力』がないせいであるが、もし『外的魔力』があつたとしても、砂漠では大して役に立たないだろう。焰は火の眷属だ。応用するにしても限度があるし、砂漠で炎は夜くらいにしか必要ない。

頭の中にアズィ・アシークの全体図、そしてその周囲の地図を思い浮かべる。今居る場所は、リルの記憶が正しければアズィ・アシークの東南部。そして最も近い国は魔法国家として名高いシャラ・

シャハル 『魔法大国』 シャラ・シャハルだ。

リル自身にはシャラ・シャハルを訪れた経験は無いが、兄弟一の旅好きであるザードは幾度かそこを訪れている。なので、リルの住まうイースヒヤンデからすれば海向こうの国交のない国と言えど、まったく知識がないわけではない。

（確か、入国審査は緩いって 国家間で指名手配でもされていない限りは入れるとかって聞いた気がするから、入国は問題ないはず。入国できればそこからザード兄様がよく使う経路で国まで帰ればいいし…… 問題はここからシャラ・シャハルに着くまでだけど、アズイ・アシークの端までは多分そんなにはずだし）

周囲の景色 果ての無い砂漠を見るとそんな感じはしないが、ザードによればそれは幻影のようなものらしい。【禁智帯】から一歩出れば、広がる砂漠も痛いほどに照りつける太陽もなくなるといふのだから不思議なものである。

大陸の中に別空間が広がっていると考えればいい、と言ったのはシーズだっただろうか。根本的に違う空間なのだから、そういう摩訶不思議なことも起こり得るのだとか。

アズイ・アシーク というか【禁智帯】について研究しているような物好きはシーズくらいなので、まだ解明できてないことは多かったりする。

そもそも普通の人間はアズイ・アシークを筆頭とした【禁智帯】に足を踏み入れようとはしないし、踏み入れたら最後、抜け出すことはできないとまで言われている。普通に行って帰ってくるザードのせいで、やはりそんな感じはしないのだが。

ともかく、当面は『間隙』を有効利用しつつ、アズイ・アシーク

を抜けることが先決だろう。

そう結論付けて、リルは焰にその旨を伝えようと口を開き　　か
けて、視界の隅で何かが光ったのに気付き、動きを止めた。

「……？」

ちかり、ちかりと光が瞬く。それは明らかに、砂の照り返しなど
ではない。

遭難者の遺品　　もとい、誰かの落し物か何かだろうかと首を傾
げたリルは、目を凝らした先にあつたものに息を呑んだ。その驚き
のままに『間隙』を出て駆け出す。

「え、姫さん！？」

リルの唐突な行動に遅れて反応した焰の声にも振り返らず、真っ
直ぐに駆けけて行った先には　　。

「男の、子……？」

身体の半ばを砂に埋もれさせた、十歳ほどの少年の姿が、あつた。

目覚めぬ少年

とりあえず、そのままにしておくわけにもいかないので、焰の力を借りて『間隙』へと少年の身柄を移したものの。

「……目、覚まさないね」

日が傾き始める頃になっても少年は一向に目を覚ます様子が無く、リルは途方に暮れていた。

砂漠の金とは相容れない、光を喰らう黒の髪。固く閉じられた瞳の色は見えない。幼さの残る輪郭を照らす陽は、刻一刻と色を変えていく。

「いやでも身体に異常はないんだろ？ だったら放つときや目覚めるって。姫さんがンな顔することない、ない」

「でも……」

そう言われても、異常が無いからこそ、どうして目が覚めないのかわからなくて不安なのだ。リルは正式に医学を学んだわけではないし、もしかしたら何か見落としがあるのかもしれないと思ってしまふ。

『知識だけが突出していても駄目だということは幾らお馬鹿なお前でもわかるよね。かと言って知識がさほど重要じゃないなどという短絡な思考に至るなんてことはないと思っているのだけど、大丈夫だろうね？ 要は意識の問題だということだよ、リル。知識があったって出来ないこと、対処しきれないことは当然あるし、実際何か

の問題に直面した時に、己の内にある知識を適切に使用できるかは各々の器量によるということを常に意識しながら、その上でできる限り知識を蓄えるというのが、お前にできる最善なのだろうね。僕は知識をお前に教えるけれど、それを実際に使うのはお前自身ではない。知識はお前の内に蓄えられていくだろうけど、お前は自分が平凡な人間であるという事を忘れてはいけないよ。お前は決して完璧な人間じゃなく、世に溢れる大多数の人間と同じように、記憶が薄れることも歪むこともあるはずだ。必要な知識がその場ですぐに余すところ無く正確に思い出せるなんてことは絶対にならないのだからね。自分の知識を過信してはいけないし、いつでも自分の判断が裏切られる可能性を考えていないといけない。不測の事態というものはどこにでも転がっているのだから。……まあ、それに対する方法は、僕よりもザードに教わるのが良いだろう。あいつほど臨機応変という言葉を体現している人間は居ないだろうからね』

二番目の兄、セクトの言葉が蘇る。病弱故に殆ど部屋から出ることのできない彼は、世界中の言語に精通し、暇さえあれば書物を読んでいた。更には一度見聞きしたことは忘れないという特技から、家族間では生き字引扱いをされていたりもする。

そんなセクトに種々様々な知識を叩き込まれたリルは、勿論医学の知識だって持っているわけだが、まだセクトの持つ知識のごく一部しか教わっていないし、セクトと違って絶対的な記憶力など有していない。

リルの持つ知識から判断すれば、未だ目覚めない少年の身体に異常はない。けれど、もしかしたらリルの知らない知識においては異常だと判断できる何かがあるのかもしれない。リルが覚え違いをしているのかもしれない。そもそも判断自体が間違っている可能性だってある。考え出したらキリがないことは、リルにだってわかってるのだが。

詮無いことだと理解しながらも、ここにセクトがいれば、と思っ
てしまう。

目覚める様子のない少年を見下ろしながら、ぐるぐると己の思考
に浸っていると、ふと焰が口を開いた。

「つーかさ、姫さん。こいつ、なんでここに居たんだと思う？」
「え？」

さつきから気になってたんだけど、と焰は少年の手首を指し示し
た。

「この紋様、どつかで見た気がするんだよねー」

その言葉を受けて、リルも少年の手首に浮かぶ紋様を見つめる。
黒い、恐らくは刺青によつて施された、手首を一周する形で精密に
描かれた紋様。その形状に、リルも見覚えがあった。

「シャラ・シャハルの王紋……？」

「あ、それだそれだ。王位継承者^{スーリヤ}に刻む王紋！ えーと、これだと
第二継承者か。……ってなんでシャラ・シャハルの王族がこん
なとこに？」

焰の疑問も尤もだった。シャラ・シャハルの王族、しかも第二位
とはいえ王位継承者が、何故ひとりでアズィ・アシークで砂に埋も
れていたのか。

供らしき姿はもちろん見あたらなかったし、それ以前に、少年の
格好は明らかに砂漠向きではない。不慮の事故で飛ばされてきたリ
ルと似たり寄ったりな格好をしている。自分の意思で来たとすれば
よほどの考え無しだし、そうでないのならなにやら不穏なものを感

じる。

「なあ、もしかして、何かものすごく面倒なもん拾ったんじゃないの、姫さん」

「……………」

焰の言葉に、リルは沈黙で返すしかなかった。

たとえ事前に少年の身分がわかっていたとしてもリルは彼を拾っただろうし、当然今から見捨てることなど出来はしないけれど面倒そうなのは確かだったからだ。

王位第二継承者。所謂王子だ。少年がどのような性格かはわからないが、基本的に王族なんかは一筋縄ではない人間が揃っている、とリルは思っている。あんまり突飛な性格じゃありませんように、と密かに祈るリル。

(…………あれ?)

そこではた、と気がついた。

「第二継承者?」

「へ?」

「この子、第二継承者なの?」

「そうだけど。…………ほら、ここ。この紋様が『一番目』って意味。ちなみにこういう紋様だと『一番目』」

言いながら宙に紋様を描く焰。焰がどれだけ長い間存在しているか、そしてその間に培われた知識の豊富さを知っているリルは、焰が真実を言っているのだと頭では理解しながらも信じられなかった否、信じたくなかった。

何故なら、それは在り得ないことだったからだ。

「第二継承者……【加護印】^{シャーン}持ちの王……」

空を見る。未だ陽は完全に沈んでいないが、宵闇が空を刻々と塗り替えていつている。もうしばらくすれば、陽の光ではなく月の光が世界を照らすようになる。そうすれば、リルの考えが正しいのか否か、はつきりするはずだ。

「……姫さん？」

リルの様子がおかしいのに気付いた焰が気遣わしげに声をかけるが、リルは少年の額を見つめたまま動かない。

そして、月明かりが少年を照らした。

拾いものの正体

リルがはつと息を呑む。焰も目を見開いた。

少年の額、その中心に、淡く輝く印を見たために。

「【加護印】……じゃあ、やっぱり」

「……今のシャラ・シャハルに【加護印】持ちは、ひとりのはずじやなかったか？」

「うん、ひとり。【加護印】持ちの王、アル＝ラシード・リュ

ーン・シャン＝シャハラ、だけ」

「じゃあ、こいつは……」

「存在を隠された【加護印】持ちか　アル＝ラシード王本人、だと思う」

「本人って、アル＝ラシードがこんなちびっこのはずないだろ？」

アル＝ラシード・リューン・シャン＝シャハラ。【加護印】と呼ばれる、シャラ・シャハルでは特別な意味がある印を持つ王。

【加護印】とは、シャラ・シャハルの初代王がその身に宿していた精霊の加護が顕れたものだと言われている。本来あるはずのない人と精霊との間の子であつたために。

その真偽は未だ不明だが、シャラ・シャハル王家に【加護印】を持つて生まれる者が居るのは確かである。建国から五百年近い歴史の中で、確認されているのは初代王を除いて三人だけだが。

そしてそのひとりがアル＝ラシード・リューン・シャン＝シャハ

ラ 初代王以外で初めて、【加護印^{シャーン}】持ちで王になった男だ。
そして同時に、兄弟殺しの王としても有名だった。

本来王位を継ぐはずだったのは、彼の異腹の兄だった。

シャラ・シャハルでは、能力や母親の身分に関係なく、前王の血を引く男児に王位継承権が与えられる。それは年齢が高いものから順に第一位、第二位、第三位……と定められ、王家にのみ伝わる特殊な刺青で肌に刻まれる。先程焰が確認したのがそれだ。

王位継承順の高い者が死ぬか、何らかの理由で王位継承を辞退しない限り、これには前王の承認が必要なのだが、低い者が王位を継承することはない。それに例外はなく、過去には事故により意識不明になった者ですら、王位を継いだという。

その決まりがあつたために、アル＝ラシードが王になる可能性はないに等しかった。第一王位継承者だった人物はアル＝ラシードより十以上年上であり、学問にも武術にも秀で、前王の覚えもめでたく、身体も健康そのもので、誰もが彼の即位を疑っていなかった。

しかし彼は、即位の直前に自殺をしたのだという。側近をすべて斬り捨てたあと、宮に火を放って。

何故彼がそんなことをしたのか、それは残された誰にもわからなかった。わからないまま、王位は継承権第二位を保持するアル＝ラシードへと継がれることになった。

何ら問題のなかった次期王の、突然の蛮行。宮に火が放たれ、彼の側近もまた死したために、詳しい事情は何一つ明らかにされることなく。

それを不審に思った民たちは、いつしかアル＝ラシードが彼を死に追いやったのではないか、と噂するようになった。

王宮内でさえ囁かれているというその噂に気付いていないはずはないだろう当人は、それについてはただ黙して語らず。

故に、流言飛語と一笑に付されるべきその憶測は、早すぎるアル
「ラシードの即位とともに諸国へと広まって 今ではほとんど事実のように語られている。もちろん、公にはないが。」

「ただの【加護印^{シャーン}】持ちなら、秘された存在って考えるのが妥当だけど 第二王位継承者の印があるなら別。それに、今までに【加^{シャーン}護印】持ちの第二王位継承者はいないの。【加^{シャーン}護印】はもちろん、王紋にも細工はきかないから、この子が『アル＝ラシード・リユーン・シャーン＝シャハラ』だって考えるのが理にかなってると思う。ありえないって思うけど……」

そう、この子供がアル＝ラシード・リユーン・シャーン＝シャハラであるはずはないのだ。

何故なら彼は リルの記憶が正しければ、二十を過ぎた青年の
はずなのだから。

第一王位継承者が死んだのは十年前。そのときアル＝ラシードは
十を過ぎたばかりの子供だった。

そして彼の即位はその五年後。シャラ・シャハルにおいて成人と
認められてすぐのことだった。

彼の治世は既に五年を経過している。つまり、少なくとも二十歳
は超えているのだ。依然として目を覚ます様子のない少年は、どこ
をどう見ても二十過ぎには見えない。

その事実が示すことをリルは出来れば否定したかったが、否定す

るだけの材料はなかった。

更に、同じ考えに至ったらしい焰が、さらりとそれを口にする。

「つつーことは、なに？　もしかして俺と姫さん、過去にいるってこと？」

言葉にすると尚更信じがたい、常軌を逸した出来事だが、残念ながらそう考えるのが一番理に適っていた。

「可能性としては、それが一番高いと思う。【禁智帯】は空間が不安定だから、そういうことも起こりうるかもしれないってシーズ兄様が言ってたし。それに、【移空石】が何か変なふうに応答を起こした可能性もあると思う。そういう現象を拒絶するはずのアズィ・アシークに出たってだけで、結構ありえないことでしょう？」

「……そういえばそうか。【移空石】があつた頃には【禁智帯】もなかったしな……そういうトンデモなことが起こってもおかしくはないってか」

「この子の目が覚めれば、その辺りもはつきりすると思うんだけど」

少なくとも、彼が何者か　本当にアル＝ラシードなのか、それ以外の人物か　はわかるだろう。それがわかれば、過去に来たのではないかという仮説が合っているか否かもわかる。

「しかし、気持ちよさそーに寝てんな、こいつ。もういつそ無理やり起こすってのはどうだ？」

「いやでも、そんな切羽詰ってるわけじゃないし……」

「や、姫さんはもうちょっと焦るべきだと思うぞ、俺。いきなりアズィ・アシークに飛ばされた、とか、もしかしたら過去に来ちゃったかも、とかにしては姫さん落ち着きすぎだし」

焰の言葉に思わず苦笑するリル。実際のところ、まだ色々と実感が
ないせいだと思うのだが、外から見れば『落ち着いている』よう
に見えるらしい。そうあるように　　そう見えるように努めている、
というのもあるのだろう。

『冷静さを欠くような状況でこそ、落ち着かないとダメだよ、リル。
内心大混乱だろうと、わけがわからない状況だろうと、ひとまず落
ち着くように意識すること。混乱してるとかって理解できてる時点
である程度余裕があるんだから、そんなに難しいことじゃないよ。
本当にどうしようもなく冷静さが欠片も無くなってるなら、自分を
客観的に見られもしないしね。だから、少しでも自分の状況を客観
的に見られる状態なら、『落ち着くこと』を最優先にして。別に、
本当に『落ち着く』までいなくてもいい。フリでもハツタリでも
いいから、『そう見える』程度まで取り繕うんだ。そうすれば頭も
通常程度には働くようになるはずだよ。そうすれば大抵のことはど
うにかなるよ。なんたってリルは僕らの自慢の妹だからね！』

ザードの言葉を思い出して、自然と笑みが零れる。それに少しだ
け不思議そうな顔をした焰は、けれどそれについては何も言わず、
ちらりと起きる様子のない少年に視線を向けた。

「ま、姫さんが無理やり起こしたくないって言うなら俺はそれでい
いけどさ。　　でもアズイ・アシークを抜けるには、夜のほうがい
いだろ？」

確かに太陽が力一杯照っている昼間よりは、夜のほうが移動には
向いている。普通ならば夜は夜で気温が下がりすぎて移動には向か
ないが、リルには焰がいる。凍えないようにするくらいは精霊イサーには
お手の物だ。

「……じゃあ、満月になっても目が覚めなかったら、起こそうかな。さすがにそんな時間になっても起きないならおかしいし」

アズイ・アシックでは、月は一晩で満ちて欠けるという。実際、先程まで細い三日月だったのが、だんだんと半月に近づいている。ザードに聞いてはいたものの、実際に見てみると異様な光景だ。

ともかく、幾度もアズイ・アシックを訪れているザードによれば、この月は陽が沈んでから再び昇る、そのちょうど真ん中の時間に満月になるらしい。時間が計りやすく便利そうだな、と、リルはちよつとずれた感想を抱いた。

「了解。……じゃ、姫さんは休んでろよ。意識してないと思うけど、疲れてるだろうし。今夜移動始めるかもしれないんだったら、尚更無理にでも寝といた方がいいと思うぜ？ もし姫さんが寝てる間に少年の目が覚めたら、ちゃんと起こすからさ」

ほらほら、と横になるように促される。リルは少し考えて、焰の言葉に甘えることにした。

「うん、わかった。よろしくね、焰」

「任せとけて。じゃ、おやすみ、姫さん」

「おやすみなさい」

自覚はまったくなかったものの、やはり疲れていたのだろう。リルは横になってそう経たないうちに意識を手放したのだった。

懐かしい夢

「……ザードにいさま」

小さな少女が、今にも泣き出しそうな顔をして、扉の陰から姿を現した。

「んん？ どうしたの、リル」

部屋で荷造りをしていた少年は内心驚き というより焦りつつも、普段通りの声音で言葉を返す。

「にいさま、たびにでるのでしょうか？」

「うん。今度はねー、北の方に行くんだ！ お土産は万年雪から採れるっていう結晶とかどうかなって思ってるんだけど」

「わたしも、」

「え？」

「わたしも、つれて行って、ください」

「えええええ！？」

「とちゅうまででも、いいです、から」

「ええ、いや、ちよつ、待って?!」

少年はあまりのことに思考が停止した。何事にも柔軟に、臨機応変に対応できることが特技の域に達している少年にとってはほとんど生まれて初めてのことだった。

自らを落ち着けるために幾度か深呼吸して、少年は少女に尋ねる。

「えーと、リル？ また、なんでそんなこと言い出したの？ 旅は

もつと大きくなってからだって父さんに言われたよね?」

だって、と少女はぽつりと零した。

「わたし、とうさまとかあさまのこともじゃないってきいた……ききました。だから、でていかなくちゃ、って」

その言葉を聞いた瞬間、少年は視線を鋭くした。

「……それ、誰に聞いたの」

「シーズにいさま、です」

「あー、もうあの馬鹿! 考えなし! 情緒欠乏人間!」

名前だけで大体の事のあらましが理解できた少年は、思いつきり元凶の人物を罵倒した。

少年の半身ともいえる存在は、時折こういう考え無しの発言による騒動を起こしてくれるのだ。罵倒するくらいかわいいものである。

「どうせ何も考えずにぺろつと言ったんだろうけど 聞いたリルがどう思つかぐらい予測しろっての。……いい? リル」

少女に目線を合わせるようにしゃがみこみ、少年は優しく言い聞かせる声音で続ける。

「確かにリルは父さんと母さんの子供じゃないし、僕たちと血が繋がってない。でも、リルが僕たちの大切な妹だっていうのは間違いないんだ。だから出て行こうなんて考えないこと。あと、敬語もいらないからね。今まで通りの喋り方でいいんだよ」

「でも、にいさまたちはおうぞく、です」

「そうだね、王族だ。この国じゃ身分なんてあつて無いようなものだけだ。まったく、セクト兄もがちに知識教え込まなきゃいいのに。型にはまった考え方ばかり教えてるからこういうことになるんだよ。あとで非難してやる」

ひとしきりぶつぶつと呟いて、少年は再び少女に向き直る。

「王族だから敬わないと、って考えるのは、まあ仕方ないよ。リルはそういう風に教わったもんね。でも、言ったよね。リルは僕たちの大切な妹だ。その妹に 家族に敬語を遣われるなんて、僕はいやだよ。それに、身分で言うならリルだって王族だ。『お姫様』なんだから」

「でも、わたし、とうさまとかあさまのこともじゃ、ない……」

「だーかーらー！ 血なんて関係ないの！ 父さんも母さんもリルを娘だつて思ってるし、実際そうなの！ 僕たちだって血は繋がってなくてもリルの兄なのっ！ だからリルは僕たちの家族なの！ 王族なの……」

「で、でも……」

尚も言い募ろうとする少女の手を、少年はがっしり掴んだ。そしてそのまま歩き出す。

「よしわかった。リル、今から広間にみんな集めるよ。リルのことだつて言えばすぐ集まるだろうし。で、今の話みんなにする。絶対みんな反対するだろうね。ていうか怒る。フアレ兄とか泣くんじやないの？ そんなに俺たちから離れたいのかー、とかつて。それに、元凶にはきっちり責任とってもらわないとだし」

手を牽かれる少女は、少年の言葉の意味がよく理解できず戸惑いながらも、握られた手のあたたかさに、何故だか少し安心したのだ

つ
た。

目覚め

リルが目を覚ましたのは、満月まであと僅かもない頃だった。

(……なんかすごく懐かしい夢、見てたなあ)

ゆっくりと身体を起こしながら夢の内容を思い返す。

幼い日、自分が兄たちと血が繋がってないことを知って、彼らと共に居てはいけないのだと考えた。短絡的にも程があるが、その頃のリルは血の繋がった家族以外は家族でないと思っていたのだから仕方がない。

それに、王家には血筋が重要だと教えられた直後だったのも大きかった。血によって連綿と続いてきたものに、自分という異分子が入り込んではいけないのだと 恐怖にも似た思いを抱いたのだ。

その後の騒ぎで、その思いはほとんど消えたのだけれど なんせ、一部は『何でそんなこと言うんだリル！ そんなに俺達が嫌いなのか！！ 一緒に住みたくないのか！？』と詰め寄った拳句に泣き出すし、一部は『何をどうしたらそんな考えに至るのかまったくもって理解不能だけど、どうしても言うんだったら僕も共に国を出ようかな。少なくともお前は小さすぎて一人で生活なんてできないし、というか死にそうだし』なんてリル以前に自分が死にかねないだろうことを言うてくるし、一部は『あらあらあら、それならいつそ王制廃止しちゃったらどうかしら』なんて軽く言うので、気付けば城内が上へ下への大騒ぎになっていたのだ。

王制廃止の法案作りまでされていたのだと後から聞いて血の気が引いたのも今では良い思い出だ。本気ではなかったとはいえ、やりすぎだとは思うが。

「おはよ、姫さん。夜だけど。……少年はまだ寝てるよ。何回か起きそうな感じにはなっただけど」
「そう……」

リルが目を覚ましたのに気付いたらしい焰が、のんびりした声音で報告してくるのに頷く。

自力で目覚めた時点で予想はしていたが、やはり少年はまだ目覚めていないらしい。しかし目覚めの兆候があったのなら良かった。このままずっと目覚めないという事態は回避できそうだ。

小さく伸びをして体をほぐし、少年に近づいてみる。気配を感じたのか何なのか、僅かに少年が眉根を寄せた。

「確かにもうすぐ目が覚めそうな感じ」
「」

言いかけたリルは、覗き込んだ少年の目がぱちりと開かれたことに驚いて言葉を切った。

「」
「……………」
「」

そのまま無言で見つめ合う。束の間の沈黙。
いち早く奇妙な硬直状態を解いたのは、少年の方だった。

「っ、何者だ!!」

言葉と共に懷から取り出され、リルに突きつけられたのは、月光に鈍く光る短剣だった。

「うわ、あつぶねーオコサマだな」

それがリルに届く前に、ひょいっと焰が手を割り込ませる。短剣は焰の掌を貫通　するかのように見えた瞬間に、刃の部分がどろりと溶けた。

「　っ!？」

言葉を失くし、息を呑む少年。そんな彼に、リルは困ったような笑みを向けた。

「ええつと……とりあえず、君を害するつもりはないから、落ち着いてもらえないかな」

「何を……」

「怪しいのは重々承知だし、君を害しないっていう証拠はないわけだけど、話くらい聞いてくれないとこっちも困るし」

「……………」

少年は柄だけが残った短剣とリルの顔とを交互に見、しばらくの後に、警戒を解かないまま口を開いた。

「…………お前は何だ」

「何、って言われても……」

「確かにお前に私を害するつもりはないようだ。殺気も感じられないし、そもそもお前に緊張がない。かといって他人を害することに慣れた類の人間であるようには見えない。　しかし、今、お前に向けた刃が溶けた。お前からは魔力を感じない。魔法士ではないのに、何故そのような芸当ができる」

少年の問いに、リルは傍に立つ焰を見た。焰もリルを見返す。

精霊^{イサー}である焰は、基本的に契約者以外の目に見えない。もちろん声も聞こえないため、少年にはリルが何かをして刃を溶かしたのだと思われたらしかった。

答えを返さないリルに、少年は視線をさらに鋭くする。

「答えられないのか」

「そういうわけじゃないんだけど……」

『お前は何だ』という問いには『ただの人間です』としか答えられないのだが、少年が知りたいのはそういうことではないだろう。かと言って焰の姿が見えない状態で、精霊石^{イース}持ちだと言っても信じてもらえないと思えない。

精霊石^{イース}も精霊^{イサー}も今やお伽噺の中の代物である。リルが契約者となつたのも、偶然に偶然が重なった結果である。恐らく、リル以外の精霊石^{イース}持ちは現代には存在しないはずだ。

（焰のことは、できる限り人に知られない方が良さんだけど……でも上手い言い訳っていうかごまかし方も思いつかないし。あんまり間を空けると、この子ももっと不審に思うだろうし）

リルは数秒悩んだものの、最終的に「もうなるようになれ」と色々諦めることにした。

（まあ、焰のことだけなら何とかなるだろうし。精霊^{イース}も精霊^{イサー}も、実際に存在してたってことは証明されてるんだから信じてもらえるはずだし……）

傍らに立つたままの焰に再び視線を向け、名前を呼ぶ。

「焰」

「わかつてるって」

苦笑いしつつ、焰が精霊石イースに触れる。精霊石イースが明滅を繰り返し、焰の足元に赤く発光する陣が浮かび上がる。

焰の全身を炎が包み込んだ。魂が奪われるかのような鮮やかな炎。それは数秒もしない内に唐突に消え、そこに残ったのは、炎に包まれる前と何ら変わらない焰の姿。しかし、外見上は何も変わらずとも、決定的に違う点がひとつあった。

「っ、お前、どこから現れた!!」

少年が焰を見、顔色を変えて叫ぶ。……そう、契約者以外にも見えるよう、実体化したのだ。

「どこからって、最初っから居ただけだな。あんたに見えてなかっただけで」

「何だと?」

「俺は精霊イサーでね。あんたがリルに突きつけた物騒なもん溶かしたの
は俺だ。問答無用で他人に刃向けるなよな? 危ないっての」

「精霊……?」

少年の表情に驚愕と疑惑の色が混じる。それも当然のことではあるのだが、このままでは話が進まないの、リルは精霊石イースのはまった腕輪を外して少年に向かって差し出した。

「さっきの言い方からすると、君、魔法士でしょう? だったらこ

れ見れば精^{イス}霊石だってわかるんじゃないかな」

少年は恐る恐る腕輪に触れた。赤い精^{イス}霊石の表面を撫でるようにして、眉間の皺を深める。

言葉遣いといい、その表情といい、子供らしくないというか、大人びすぎているというか、見た目とそぐわないなあ、とリルは思った。

しばらく精^{イス}霊石を観察していた少年は、なるほど、と溜息と共に呟いた。

「信じ難いが、確かにこれは精^{イス}霊石のようだ。これほどまでに高密度な魔力結晶は見たことがないし、精^{イサー}霊以外に何もないところから現れるなどということができる存在を、私は知らない。だが、それなら余計にお前が何者かわからない。古の記録によれば、精^{イス}霊石を持てるのは魔術師のみのはずだ。だが、お前からは魔力を感じない。魔術師であるはずがない。……もう一度問う。お前は何だ？」

そういえばそうだった、と、そのことをすっかり忘れていたリルは内心焦った。そもそも魔術師ですら現在はほとんどいないのだ。余計に不審極まりない。

実際は、『発現因子』さえ持っていれば、魔術師でなくても精^{イス}霊石持ちになることはできる。いくつか条件が必要ではあるが。しかしそれは、リルの住む国・イスヒヤンデにしか知られていない。

一般に認識されている個人の『魔力』が『魔力因子』と『発現因子』の組み合わせによって現れるのだということも、イスヒヤンデ以外には知られていないのだ。それを一から説明するのは骨が折れる。その理論を組み立てたシーズならばともかく。

リルはどう説明しようか悩み 結局、説明そのものを放棄することを選択した。

「ちよつと偶然が重なって精霊石^{イス}持ちにならざるを得なかっただけの、普通の人間だよ。怪しいけど怪しい者じゃないから」

我ながら意味がわからない、と思いながらリルはそれをごまかすようにへらりと笑った。

「……………」

少年はじつとリルを見つめる。ますます眉間の皺が深くなり、痕が残っちゃったりしないだろうか、とリルは変な心配をした。

「……嘘は、ついていないようだな。わかった、信じよう」

少年の言葉に、リルはほつと息をつく。しかし、王族（多分）がそんな簡単に正体不明の人間の言い分を信じて大丈夫なんだろうか、とも思った。

それとも自分があんまりにもとろそうだとか間抜けそうだとか、そんな感じに見えるのだろうか、とまで考えたところで、少年が周囲を見回し絶句しているのに気付いた。

確認と今後のこと

「……ここは、どこだ」

「え、ええっと……アズイ・アシーク　　って言うってわかる？」

「アズイ・アシークだと!？」

叫ぶような少年の声に思わず肩が跳ねる。ちよつと頭に響いた。

「『金の砂に埋もれた大地』　　確かに文献と一致してはいるが…

…」

足元の砂を手で掬い、何事かぶつぶつと呟いた少年は、「しかし」と言葉を続けた。

「ここがアズイ・アシークならば、夜は極寒の地に　　」

言いかけたところで、少年は何かに気付いたようにはっと空を見た。

そこに煌々と照る満月に顔色を変え、己の顔を隠すように手で庇う。

「……………」

「……………」

またも奇妙な沈黙が降りる。

ちなみに焰は暇そうに宙を見てぼんやりしていた。わりといつもの事ではあるのだが、こういう時くらい真面目っぽく振舞ってくれ

ても罰は当たらないのでは、とリルとしては思ったりする。

「……えっと、その　それ、【加護印^{シャーン}】だよな？」

どちらにしる確かめねばならなかったのだ。リルは意を決して尋ねる。

少年は唇を噛み締め、ほとんど睨むようにリルを見つめ　搾り出すような声音で「……そうだ」と頷いた。

「名前、聞いてもいいかな。　あ、わたしはリルっていうんだけど」

「これが【加護印^{シャーン}】だと知っているのなら、聞くまでもなくわかっているのではないのか」

「いや、……一応、確認みたいな感じで」

またもへらつと笑ったリルに何を思ったのか、少年は額を隠していた手をどけて、溜息をつく。

……この子、溜息のつき方が堂に入ってるなあ、とリルは思った。十歳前後の外見からするとものすごい違和感だが。

「　アル＝ラシード。アル＝ラシード・リユーン・シャーン＝シャハラだ」

（ああ、やっぱり……）

もしかしたら自分の仮説が間違っているかもしれない、と淡い期待を持っていたリルは、微妙に打ちのめされた気分だった。しかしそれを表に出すことはせず、さらに問いを重ねる。

「……シャラ・シャハルの第二王位継承者の？」

「ああ」

名前を言ったことで何か吹っ切れたのか、あっさりと少年は肯定する。

（せめてちよつとくらい言い渋って欲しかった……）

少年は何も知らないとはいえ、追い討ちをかけられた気分だった。とはいえ、少年が言い渋ったところで根本的には何も変わらないのだが。

「ちなみに、今、何歳？」

「……何故そんなことまで訊く？」

「えつと、ちよつと気になって。あ、わたしは十五なんだけど」

「……先日、十を数えたところだ」

「そ、そつか……」

（これは、確実に過去ってことだよな……だとしたら、どうやって帰ればいいんだろう。アズイ・アシック抜けてイースヒヤンデに帰っても、時代が違ったら意味がないし）

そもそもこの時代の自分はどうなっているのだろう。

以前シーズが時空のねじれによって同一人物が同時代に存在した場合の影響について論文を書こうとしたが、資料がなさ過ぎて結局完成しなかったのだ。仮説でいいから聞いておくんだった。

……まあ、今更後悔しても仕方がない。自分がこんな状況に置かれるとは予測できなかったのだし。気持ちを切り替えて、リルは少年に向き直った。

「ここがアズイ・アシックだって知らなかったみたいだけど、だっ

たらどうしてここに居たの？ 君、わたしが見つけたときは砂に埋もれてたんだよ？」

「それは……」

少年 アル＝ラシードは目を伏せた。歯切れ悪く、ぽつりぽつりと言葉を紡ぐ。

「私にもよくわからない。……自分自身の意思で来たのではないのは間違いないが、意識を失う前の記憶がはつきりしないんだ」

「……思い出せる最後の記憶は？」

「夕食を終えて、部屋に戻ったところまでだ。……これは一服盛られたと考えるべきか」

さらっと言われた内容に引っ掛かりを感じて、リルは首を傾げた。見た目はどこからどう見ても子供でしかないのに、当然のように一服盛られたなどと言うのにもつつこみたいが、それ以前に。

「夕食？」

「ああ。……どうした？」

「夕食って言うからには、覚えてるのって夜だよね？」

「そうだが……」

「……ええ？」

混乱に、ちよつと頭を抱える。怪訝そうにアル＝ラシードが視線を向けてくるが、それどころではない。

リルがアズイ・アシークに 『過去』 に跳ぶ前に居た、リルにとつての『現代』の時刻は夕方だった。

そして、跳んだ先はどう考えても昼間であり、リルがアル＝ラシードを見つけたのは、太陽の様子からして昼を少し回った頃だったはずだ。つまり、アル＝ラシードは夜に意識を失ってから昼過ぎま

での間にアズイ・アシックに連れてこられたことになる。

ついでに言えば、跳んだ直後にリルが立っていた場所から、アルⅡラシードが倒れていた場所まではそう離れていない。誰かがいれば絶対に気付くような距離だ。

だが、アルⅡラシード以外の人影をリルは見えていない。

ならば、彼は結構な時間あの場所に居たはずなのに。

「普通に元氣そうなのは何で……？」

おかしい。おかしすぎる。

リルが診た限り、熱による異常もなかったし、脱水症状も起こっていないかった。思い返せば日除けすら被っていないかったというのに、それは普通ありえない。

「何のことだ？」

またも眉間に皺を寄せた少年に、リルは簡単に自分の抱いた疑問を説明する。

すると、彼は怪訝そうな顔をするでもなく「ああ」と軽く頷いた。

「それは【加護印^{シャーン}】のせいだろう。『加護』が現れる条件はさっぱりだが、今までにも幾度かこういうことはあった。永久的に、絶対的に、というわけではないらしいが、これは私を護る」

「そうなんだ……」

【加護印^{シャーン}】はシャラ・シャハル王家にしか現れない。しかも過去の事例もほとんどないので、リルもそれがどういうものかはよく知らないのだ。

……シーズ兄様に話したら、アルⅡラシードを拉致してでも研究したがるだろうな、と思ったのは秘密である。

「ところで、お前は どうしてここに居たんだ。アズイ・アシークに自ら足を踏み入れるなどという、自殺行為に等しい愚を冒すようには見えないが」

「ああ、それは、その、」

純粹に疑問に思ったらしいアル＝ラシードの問いに齒切れ悪く返事をしつつ、リルは高速で頭を働かせる。

本当のところを告げたとしても、普通に考えて信じられないだろう　　というか怪しさが増すだけだ。【移空石】なんて絶対知らないだろうし、そもそも実物も手元にない。作り話だと思われるのが関の山だろう。

「わたしの兄様が【禁智帯】の研究をしてるの。それでちょっと頼まれて調査に来てて」

結局、ザードが【禁智帯】で人に会ったとき　　というか行き倒れを助ける際に使うという言い訳を口にした。

怪しさの点ではどちらも同じようなものかもしれないが、まだ信憑性がある……気がする。

「【禁智帯】の研究を？　そんな話、聞いたことがないが」

「地図にも載ってないような国に住んでるし、兄様、学会とかにも興味ないから。知らなくても当然だと思う」

リルの言葉の真偽を見極めようとするかのように、アル＝ラシードは目を眇めたが　　納得したのかそうでないのか、「そうか」とだけ呟いて視線が外された。

本当に年齢に見合わない仕草をする子だなあ、と、思いつつ、気付かないようにほっと息をつくりル。

「その、兄の要請でここに来たというのなら、お前はアズイ・アシークを抜ける方法を知っているんだな？」

「うん、一応。確実に抜けることはできるよ」

「ならば、私も共に連れて行っではもらえないか。私ひとりではここを抜けることはできない」

「え、い、いいけど……」

予想外の申し出に目を丸くする。言われなくともアズイ・アシークを抜けるまでは行動を共にしてもらうつもりだったが、まさか相手から請われるとは。

いや、人としては当然かもしれないのだが、王族としての矜持とかそういうのがあったりするのではないかと思っていたのだ。ちょっと偏見入ってたかな、と反省するリル。

「私は自分の宮からほとんど出たことがない。知識の大部分も書物からのものだ。アズイ・アシークについては何も知らないに等しい。行動の指針は全面的にお前に任せよう　よろしく頼む」

「こ、こちらこそよろしく……？」

そんなやりとりをする二人を見ていた焰が、何で疑問形なんだよ、と呆れたように呟いた。

アズイ・アシーク 1

「それじゃあ、えっと アル＝ラシード」

一応彼が王族である（しかも後に王となる人物である）ことがほぼ確定したため、呼び方に一瞬悩んだものの、今更畏まった喋り方をするつもりはリルにはない。

どうしても『王族』というより『年下の男の子』というふうに意識してしまうのだ。なので、ひとまず自分の好きなように呼ぶことにする。

「アズイ・アシークをどう抜けるかとか、あとアズイ・アシーク内を移動するときの注意みたいなのも、一応説明しとこうかと思うんだけど……」

どうしても嫌だとか不快だとか言われたときはアル＝ラシードの希望通りに呼ぼう、と考えて、話を切り出しつつ反応を窺ってみたのだが。

「……？」

アル＝ラシードは真顔でリルを見たまま固まっていた。雰囲気的に嫌がってるとかそういう感じではなさそうなのだが、無言でいられるのも居心地が悪い。というか気になる。

「どうかした？」

訊ねてみると、アル＝ラシードはやつと硬直がとけたように肩の力を抜き、リルから視線を外して小さく息を吐いた。

「いや……血縁以外に敬称を付けずに呼ばれるのは初めてだったから、少し……驚いた、のだろう。自分でもよくわからないのだが、多分」

本当に自分でもわからないらしく、首を捻りながらアル＝ラシードが言う。

「嫌だったら、呼び方変えるけど……」

一応真名である『ラシード』のみでは呼ばずに、準名の『アル』も添えて呼んだのだが、よく考えなくても彼とは出会って間もないのだ。さすがに馴れ馴れしすぎたかな、と心配になるリル。

シャラ・シャハルの民の名は少し独特で、準名・真名・守護名、そして出身、もしくは所属名で構成される。他国における『名前』にあたるのが準名と真名であり、準名のみか準名と真名を合わせて呼ぶのが通常だ。真名のみで呼ぶのは特に親しい間柄の場合であり、家族や恋人間が基本である。

リルの認識では『アル＝ラシード』が『名前』だったため、準名と真名を合わせて呼んだのだが、あえて王族を敬称無し、且つ名前と呼ぶのなら、準名の『アル』のみの方がこの場では正しい呼び方だったことに遅ればせながら気付いた。

それゆえのリルの言葉に、しかしアル＝ラシードは即座に首を横に振った。

「いや、構わない。呼ばれ方にこだわりはない とうるかこだわ

るほど呼ばれたことはないし、好きなように呼んでくれていい。
…ただ、少し気になったのだが」

「？」

「お前は、私の身分に対して畏まることはしないのだな」

ただ事実を確認するように　しかしどこか感心するような響きで紡がれたアル＝ラシードの言葉に、リルはきょとんと目を瞬かせた。

（畏まる……）

確かにリルはアル＝ラシードに対して敬ったり畏まったりするような態度をとらないし、そうしようとも思わない。

アル＝ラシードを、王族というよりはただの少年として認識していることもあるが、そもそもリルはシャラ・シャハルの民ではない話くらいは聞いたことがあるが、遠い海向こうの、恐らく一生目にすることもないだろうと思っていた異国の人物を目の前にして、いきなり敬意や畏怖を抱くはずもなく。

更に言えば、大変に小さな国ではあるが、故国であるイスヒヤンデにおいて、リルは一応王族の末席に名を連ねている。イスヒヤンデは身分などあってないような国ではあるが、曲がりなりにも敬われる側の人間に属しているというのもあるのだろう。

その辺りのことを言うべきかとリルは一瞬考えたが、『異国民だから』とか『一応王族だから』などと言ってしまえば、どこの国の者かというのは絶対に訊ねられてしまうだろう。それはリルにとつてとても都合が悪い。

大陸自体が違つたため、ごまかせる可能性はあるものの　そんないちかばちかの賭けのようなことをあえてしようとは思わない。

「ああ、わたしそういうのあんまり気にしない方だし……っていうか実感が湧かないっていうのもあるんじゃないかな」

なので、全くの嘘ではないがそれが全てではない言葉を口にする。どうやらアル＝ラシードは身分にこだわるタイプではなさそうな気がするので、別にこの理由だけでも大丈夫だろう。

「そうか。それもそうだな」

案の定、アル＝ラシードはあっさりと頷いた。それを確認して、気付かれないように小さく息をつく。

（何て言っても『魔法大国』だし、できる限り隠したほうがいいよね。どれくらい記録が残ってるかはわからないけど……何がきっかけになるかわからないし）

イスヒヤンデについては出来うる限り伏せなければ。伝承のようにあやふやな存在のままにしなければ。

『古国イスヒヤンデ』は忘れられたままでいい。否、そうでなくてはならない。

それがイスヒヤンデの王家、ひいては民の総意なのだから。過去を繰り返すまいと、古の時にイスヒヤンデを選んだ道なのだから。

「……？　どうかしたのか」

声をかけられて、リルは自分がいつの間にか考え込んでいたことに気付いた。無言なのを訝ったのか、アル＝ラシードが顔を覗き込んでいる。

「あ……うつん、何でもない。それで、アズイ・アシークをどうやって抜けるかなんだけど」

言いながら、リルは砂地に大雑把な地図を描く。

「わたしたちが今居るのがこの辺り。アズイ・アシークには遮蔽物とか基本的にないし、方角もわかってるから、最短距離でアズイ・アシークの端まで向かうつもり。で、見ればわかると思うんだけど、シャラ・シャハルが一番近いの。今からだったら夜が明けるまでにアズイ・アシークを抜けて国境まで行けると思うから、君が大丈夫なら出発しちゃいたいんだけど」

「なるほど……了解した。だが、アズイ・アシークの夜は寒さが厳しいと」

そこまで言って、アル＝ラシードは眉間に皺を寄せた。

「そうだ、先程も思ったのだが、何故寒くないんだ。文献が間違っていたということか？」

問われ、リルは慌てて首を振る。そういえば先程、【加護印】^{シャーン}やアル＝ラシードの素性について話す前にも、彼はそれを口にしたのだった。

「アズイ・アシークの夜が極寒だっているのは間違っていないよ。ただ、今居る場所だけちよつと例外で」

「例外？」

「シーズ兄様は、……あ、【禁智帯】の研究をしてる兄様のことなんだけど。シーズ兄様は『間隙』って呼んでる。何て言えばいいかな、起こるはずの事象が拒絶される地帯……こう、寒さとか暑さ

とか全部ひつくるめて『何もない』状態になる場所があるの。わたしたちが今居るのがそこだから暑くも寒くもないだけで、『間隙』を出たら文献通りの寒さのはずだよ」

「『間隙』……起こるはずの事象が拒絶される……？」

リルの説明にますます眉間の皺を深め、ぶつぶつと呟くアル＝ラシード。その様子を見て、言わない方が良かったかな、と少し不安になるリル。

別に、『間隙』から出てからの体感気温を一定に保つことなど、焔の力をもつてすれば容易なことだし、アル＝ラシードにとって未知の知識　それこそ信じられるかもわからないような内容を説明して、アル＝ラシードが自分に対して感じているだろう怪しさとかその他諸々を増幅するのはリルの本意ではない。

けれど、ここで『文献が間違っていた』ということにしてしまうと、アル＝ラシードに嘘を教えることになってしまう。

そうすると、無いと願いたいものの、再びアル＝ラシードがアズイ・アシークに来てしまったときに、確実に困ったことになる。

嘘が嘘だとわかってしまうこと自体は、アル＝ラシードの中のリルの心象が悪くなるだけなので大した問題ではない。恐らくアズイ・アシークを無事抜けるなりして別れば、会うこともないだろう相手であることだし。

何が問題かと言うと　アズイ・アシークの夜を甘く見ると、本当に死にかねないということである。間違った知識を植えたがために、アル＝ラシードが生命の危機に晒されてしまったら、寝覚めが悪いどころの話ではない。

なので信じてもらえないことを想定しつつも、一応真実を告げたわけだが　あまり不審がられると、アズイ・アシークを共に抜け

る行程で問題が起こる可能性もあった。

自分の判断の是非に悩むリルだったが、いつの間にか咳くのを止めていたアル＝ラシードが自分をじつと見ていたことに気付き、何とかフォローを試みることにした。

「ええつと……その、根拠は兄様の研究成果だから、いきなり信じるって言っても難しいとは思うけど、実際ここだと寒くも暑くもないし。少なくとも全くのでたらめだってことはない、と思うんだけど」

どうかな、と、恐る恐るアル＝ラシードを見る。

すると、アル＝ラシードは考え込むように一度目を閉じた後、しばらくして何か自分の中で折り合いをつけたらしく頷いた。

アズイ・アシック 2

「わかった。その『間隙』とやらの中にいるから、寒さや暑さを感じない、ということなら、とりあえず納得できる。原理などにも気にはなるが、優先すべきはそれではないしな。……ここを出れば文献通りの気温だということだが、ならばどうするんだ？ 私もお前も、そんな寒さに耐えられるような格好はしていないだろう」

「それは焰が居るから大丈夫。実体化した時にわかったんじゃないかと思うけど、焰は炎の眷属だから。わたしたちの周囲の気温だけ適温に変えてもらって、移動するときに凍えないようにするつもり」

そう言うのと、アルⅡラシードは少し驚いたようだった。

「精霊^{イサー}は【禁智帯】でもそのようなことができるのか？」

「うん。精霊^{イサー}が使うのって、魔法とも魔術とも違う力だから……それでも【禁智帯】だとちょっとうまく力を揮えないらしいけど」

言いつつ、蹲って何やらやっているらしい焰に目を向ける。リルたちからすると背中しか見えず、何をしているのかはわからないのだが、随分熱中しているらしい。視線に気付く様子は全くない。

「……あんなんだけど、精霊^{イサー}なのは間違いないから。寒さに関しては心配しないで大丈夫だよ」

少しでも安心してもらえるようにと笑みを向けたのだが、アルⅡラシードは無言でふいっと顔を背けた。

（あれ、何かまずいこと言っちゃった？ それとも『誰が不審者と馴れ合うか！』的な意思表示だったり？）

そう長い間ではないと言えど、共に行動するのだから、円滑な人間関係を築きたいとリルは思うのだが、アル＝ラシードは違うのかもしれない。

（まあ、わたし、怪しいもんね……）

王族だし、対人関係も警戒から入るのが基本なのかもしれない。無理に打ち解けようとするのは逆効果だろうと考えて、リルはとりあえず気にしないことにした。

「それじゃあ、出発してもいいかな？」

極力優しい声を意識して尋ねると、アル＝ラシードは顔を背けたまま、ぽつりと返した。

「……………構わない」

それにリルは少しだけ笑って、「そっか」と頷く。

空を見上げれば、少しずつ欠けゆく白銀の月が煌々と照っている。それを確認してほっと息をつくリル。

（時間の方は大丈夫そうかな。見た限り、今はアズイ・アシークの中も凪いでるみたいだし、移動しても問題ないよね）

【禁智帯】の中は、『外的魔力』が欠如している関係で時折荒れることがあるのだと、リルはザードに聞いていた。

アズイ・アシークにおけるその兆候は、月が赤く染まること。綺

麗な白銀の月に、どうやらそれに遭遇せずに済みそうだ、と安心する。

荒れる、と一口に言ってもその内容は様々らしい。最も多いのが砂嵐だということは知っているが、それ以外はリルもよく知らなかった。しかし、砂嵐にしろ、それ以外にしろ、巻き込まれず済むのならそれに越したことはない。

(……って言っても、アズイ・アシックから出るときには絶対に何かしら起こるわけだけど)

リルに可能なアズイ・アシックからの脱出方法は、ある意味安定していると言えるアズイ・アシックの状態を、多少なりと揺り動かす 乱すことになる。少なくとも、今の『風』の状態を崩すことになるのは確実だ。できる限り迅速にアズイ・アシックの外に出るつもりではあるが、それでも危険な目に遭う確率はゼロではない。

とりあえず、アル＝ラシードには危険が及ばないようにしようとひっそり心に決める。

「あ、やっとな出発？」

暇に飽かして砂で遊んでいたらしい焰が、立ち上がったリルを仰ぎ見る。

ずっと我関せず状態だったことに色々言いたいような、もうどうでもいいような気分になりつつ、リルは焰に近づいた。

「うん、出発。気温の調節は任せるけど、大丈夫？」

「大丈夫大丈夫。それくらい軽いって。微調整までお任せあれ」

「いや、そっちじゃなくて魔力残量のこと」

言えば、焰は自分の内を探るような少しの間をおいて、にっと笑った。

「そつちもだいじょーぶだって。満タンとまでは言わねーけど、半日くらい実体化できる程度にはあるし」

リルは焰の契約者だが、『魔力因子』を持っていないので、焰に魔力を供給することができない。なので、焰はリルの周囲の人間主に兄たちの魔力を精霊石^{イース}を通じて吸収しているのだという。兄たちは焰をリルの護衛代わりのように扱っているので、魔力を吸収されることには全く頓着していない。というかむしろ推奨している。

イースヒヤンデに居れば魔力について心配する必要はないのだが、ここはイースヒヤンデではない。精霊石^{イース}に貯められている魔力が尽きたら、焰はこうして顕現することもできなくなってしまうのだ。しかし、リルが思っていたよりも貯めてあったらしい。実体化には結構な魔力を必要とするのだが、それを半日行える程度にあるのならば問題ないだろう。

「それなら大丈夫かな。じゃあ、よろしくね　って」

まだ座り込んでいる焰の傍らに歩み寄ったリルは、何気なく視線を下に向けて、頬を引き攣らせた。

「ほ、焰、それ……」

「んー？　スゲーだろ。俺の自信作！！」

そこにあっただのは、砂で描かれたとは思えないほど精緻な肖像画と言って良いか悩む砂絵だった。ついでに上手すぎて引くレベ

ルの代物だった。

色彩は無く、金色の砂のみで表現されているはずなのに、今にも動き出しそうなくらいに生氣を感じさせる仕上りの、間違いない素晴らしい出来の砂絵だったが。

「何でわたしの姿なの！ しかもこれ小さい頃だし！ っていうか泣いてるところだし！！」

「えー……何となく？」

「何となくでこんなの描かないでー！」

「悪趣味にも程があるでしょう！」と怒鳴るリルにも、焰は悪びれる様子はない。

「何となくだけど、一応理由はあるんだぜ？ どうせ絵にするならもう見れない昔の姫さんがいいなーって思ってたさ。ちっさい姫さんが泣いてるのってすげえ可愛かったから、つい。いや今の姫さんも可愛いんだけど、それとはまた違うって言うか。こう、ちっさくてふにふにしていたでさえ殺人的に可愛いのに、顔真っ赤にして必死で泣き止もうとしてるんだけどできなくて、恥ずかしがって小さくなって声殺そうとしてるけど殺しきれない感じの」

「ちよ、焰……っ」

何かもういろいろとつつこみどころがありすぎる。そして恥ずかしいことこの上ない。

（これだから精霊はっ！）

精霊^{イサー}は気に入った人間としか契約をしない。つまり最初から契約者にベタ惚れ状態と言っても過言ではないのだ。

そして人間の羞恥心とかそういうものへの理解が基本的にない。

少なくとも焔にはない。どちらかと言えば気の利くほうであるのに、
変なところで理解が足りなかったりする。

リルは無言で焔の正面に回り、全身全霊を込めてその砂絵を崩した。

「あー！ 姫さん何するんだよ！？」

「それはこっちの台詞だから！」

「俺の汗と涙の結晶ー！！」

「汗も涙も出てないっていうか出ないでしょう！ 何で焔は時々すごいバ力になるの！？」

「心意気の問題だっての！ あーあ、見るも無残な姿になっちゃって……」

「だって『間隙』だから、放っておいたら半永久的に残っちゃうでしょう！？ わたしそんなの耐えられない！」

「俺は全然構わないんだけどなー」

「焔が構わなくてもわたしが構うの！ ……とにかく、出発だからね。ちゃんと気温の調節してね？」

「はいはい、りょーかい」

名残惜しそうに砂絵の残骸を見つめつつ、焔が頷く。

「……よくわからないのだが、もういいのか？」

「……うん、大丈夫」

リルと焔のやりとりを黙って聞いていたアル＝ラシードが怪訝そうな顔をしつつ尋ねてくるのに、リルは疲れた笑みを浮かべて答えた。

……とりあえず、アル＝ラシードに見られなかっただけでよしと

しよう、と自分を慰める。

嫌がらせかと思うくらい見事な再現っぷりだったのだ。さすがにあんなもの見られたら平然と会話できない。

気をとりなおして、リルはアル＝ラシードに近づく。

「それじゃあ出発しようか」

「了解した」

言いながら立ち上がるアル＝ラシードを見て、リルは改めて彼の幼さを意識する。身長のことであって年齢よりも幼く見られがちなリルと比べても、頭一つ分くらい差があった。

全体的に華奢で頼りなげな印象を抱くのは、病弱ゆえに見た目だけは儚げなセクトに通じるものを感じるからだろうか。

王族だから食うや食わずの生活をしているとは思えないが、ちゃんと食べてるのかな、とリルは少し心配になった。

じつと自分を見つめたまま動かないリルに気付いたアル＝ラシードが声をかけるまで、リルはシャラ・シャハル王族の食生活に思いを馳せていたのだった。

アズイ・アシック 3

「ねえ、少し気になったんだけど」

『間隙』を出て、慣れない砂地に足をとられながら何とか歩みつ、アズイ・アシックにおける注意事項（ザード作）をアル＝ラシードに伝え終えたのが少し前。

無言で歩き続けるのも気が滅入るし、と思つて話の種を探していたのだが、ふと疑問を抱き、リルはアル＝ラシードに視線を向けた。

「何か？」

アル＝ラシードは、最初こそ何度か転んだものの、だんだんコツが掴めてきたらしい。足元に注意を払い続けずとも大丈夫だと判断したようで、不思議そうにリルを見上げてきた。

ちなみに焰は、魔力の消費を抑えるために精霊石イースに戻り、リルたちの周囲の気温調節に専念している。おかげで寒さに凍えることなく快適な道行きだ。

リルはアル＝ラシードを見つけたときのこと、そして彼の言葉を思い返しつつ、抱いた疑問を口にした。

「君が誰かの手によってここに連れて来られたんなら、その連れてきた人ってアズイ・アシックを確実に抜けられる算段があったっていうことになるよね？」

すると、アル＝ラシードはそのことに思い至っていなかったらし

く、数瞬おいて戸惑うような声を出した。

「……あ、ああ。そういえば、そういうことになるのか。アズイ・アシークを抜けられるかどうかというのは、ほとんど運によると聞いていたのだが、そうではなかったのか？」

「わたしもそう聞いてるんだけど……兄様とかは規格外だし」

アズイ・アシークは、まだシャラ・シャハルも存在しなかったような遠い遠い昔に、魔術を生み出した大国があった場所にある。その国は、大きすぎる力を持ったがために内乱を起こし、何も残さず滅びた。

それは禁じられた魔術によってのことだったらしい。その魔術の影響なのかそうでないかは定かではないが、その国があった場所から『外的魔力』が失われてしまった。そしてその周囲を、国防のためだったらしい結界が覆っている状態だ。

アズイ・アシークを抜けられるかどうかが運によると言われているのは、その結界がアズイ・アシークから出るのを阻むからだ。

元々は外敵を拒むためのものだったが、何らかの理由で効果が反転したらしい。侵入を拒むものではなく、内から出ることを許さないものへと変質している。

アズイ・アシークから出ることができた幸運な者たちは、結界の綻びがある場所にたまたま行き着いたか、もしくはアズイ・アシークから『はじかれた』のだろうとシーズは言っていた。

結界自体の強固さは、今現在まで残っているという時点で言及するまでもないものであるが、変質した影響なのか、稀に綻びが見つかることがある。

ただし、結界には自動修復機能もあるので、一度見つかった綻びがいつまでも残っているということはありえないのだが。

アズイ・アシークは、言ってしまえばこの世の理が通じなくなっている異空間に等しい。故に、『どこか』へ繋がる歪みのようなものが現れることがあり、それによってアズイ・アシーク外にとばされることを、『はじかれる』とシーズは表現していた。

それに遭遇してアズイ・アシークを抜けられるかどうかは運以外の何ものでもなく、アズイ・アシーク内の別の場所に繋がる確率のほうが高いらしいので、確実に抜けられる手段というのは流布していない。

シーズの要請で度々アズイ・アシークを訪れているザードはというと、歪みを利用するのでも、結界の綻びを利用するのでもない、裏技ともいべき方法で出入りしている。

その方法はリルには使えないものなので、リルはシーズが研究によって生み出した、魔術を一時的に無効化する方法で結界を抜けようと考えていた。

しかしその方法は一般に知られているものではない。魔法ならともかく、魔術はその希少さもあいまって、現在ではあまり研究が進んでいないのだ。

魔術が一般的だった頃はその限りではなかったが、魔術を生み出した大国が滅びたときに、魔術に関しての技術や記録はほとんど失われたと言われている。

だからこそその疑問だったのだが　リルには一つだけ、心当たりがあった。

聞くか聞くまいか悩んだ拳句に、しどろもどろに切り出す。

「その……答えられないならそれでいいんだけど、シャラ・シャハル王家に魔力がない人っていない？」

「魔力がない人……？」

途端怪訝そうな顔になったアル＝ラシードに、リルは肩を縮こまらせた。

（『魔力がない』っていうか、正確には『発現因子』がない人なんだけど、その辺の説明、わたしじゃうまくできないし。そもそも信じてもらえるかわからないし。一般的には『魔力がない』って認識になるはずだから、間違っではないよね？……でも、この様子だといないのかな。シャラ・シャル王家なら条件も揃ってるから、居てもおかしくないと思ったんだけど）

リルの言葉の意味を汲み取れなかったのか、俯き気味に考え込んでいたアル＝ラシードは、しばらくして得心いったように顔を上げた。

「それはつまり、他者に感じ取れないほど弱い魔力しか持たない人物が居るかどうか　我が王家に不義の子が存在する否かを聞いているのか？」

「え！？」

「違うのか？」

予想外なアル＝ラシードの言葉に驚愕の声をあげると、アル＝ラシードもまた驚いたように目を丸くした。

「違うよ！　正統な血をひいてるのに強い魔力を持たない人がいないかってこと！」

この世界では、魔力というのは大なり小なり誰もが持っているというのが一般的な見解だ。他人が感じ取れるほどの魔力を纏うのは魔法士や魔術師、もしくはその才覚がある者がほとんどで、そ

れは生まれたときから無意識に魔力によって身体を守ろうとするためだ。

魔力の強さは遺伝するものではなく、魔法士の子が魔法士になれるほどの魔力を持って生まれるとは限らない。

しかし、例外も存在する。

それが、シャラ・シャハル王家を筆頭とするような、連綿と続く強力な魔力血統だ。

血をひくものが『必ず』強い魔力を抱いて生まれるとされる血統。大体においてその血統は、長い時を経て認知され、神格化されていく。

結果、王家やそれに連なるものとなるのが通例だった。

「いや、それならばやはり、不義の子が居るかということではないのか？」

「……どういうこと？」

十歳を過ぎたばかりだというアル＝ラシードの口から『不義の子』などという言葉聞くのは大変な違和感だったが、それに目を瞑って問いかける。

「我が王家において、強い魔力を持たぬ者というのは、国生みの精霊に認められていない。正式な契りを交わしていない男女間の子供だけだ。正式な契りを交わしているならば、どんなに血が薄くとも魔法士になれる程度には強い魔力を持って生まれるはずだが」

「……………。そうなの？」

「ああ。……知らずに尋ねたのか。それで、それがどうかしたのか？」

「え、っと、その……そういう人なら、アズイ・アシークを抜けら

れるはずなの。理論上は、だけど」

ある程度以上の『魔力因子』を保有し、『発現因子』を持たない者　長く続く魔力血統にこそ現れる、その性質を持つ者は、アズイ・アシークを覆う結界を抜けられる。

詳しい仕組みまではリルは知らないが、『そう』であることだけは教えられていた。

その実例を知っている　故に、何らかの要因で己がアズイ・アシークと外界を行き来できると気付いたシャラ・シャハル王家の誰かが、その特質を使ってアル＝ラシードをアズイ・アシークに閉じ込めようと画策したのではないかと思っただが……アル＝ラシードの言を信じるなら、その考えは間違っていたことになる。

(……でも、他にアズイ・アシークを確実に抜けられる方法なんて、シーズ兄様並みの研究馬鹿　じゃなかった、魔術に関して研究熱心な人が開発とかしてない限り無いと思うんだけど。そもそも今は『過去』だから、そんなのがあったなら兄様たちが言わないはずがないし、アル＝ラシードが知らないだけ……？　でも、『魔法大国』で、しかも魔力血統　王家の血をひいてる人間が、それを隠すことなんてできる？)

考えれば考えるほど深みにはまっていくような気がして、リルは一旦それについて考えるのを止めることにした。

アル＝ラシードをここに連れてきた人物がどんな手段でアズイ・アシークを抜けたにしろ、一度失敗した計画を再度実行に移すということは考えにくい。

(それに、もしアル＝ラシードの知らない誰かが『そう』だとしても、多分私には何もできないし　『しちやいけない』んだよね……)

ザードほどに臨機応変に対応できる能力があるのなら別だが、ここが『過去』であることを抜いても、リルが　というよりはイールの祖国スヒヤンデに関係するモノがそれ以外のモノに深く関わるのは歓迎されることではない。

きつとリルが望むなら兄たちも両親もそれを許してくれるだろうけれど、だからこそリルはそれに甘えてしまいたくなかった。

かといって、それですべてを割り切ることもリルにはできない。リルが思う通りの人物が存在するなら　しかも『魔法大国』シャラ・シャハルに存在するなら、その人が辛い境遇に置かれている可能性は限りなく高い。

ましてや、『魔力がない』と判断されることが、『不義の子』である証となってしまうらしいシャラ・シャハル王家の人間であれば尚のこと。

（今ここでこうやって考えても仕方ない、か……。まずはアル＝ラシードを無事にアズイ・アシークから連れ出さないと）

どちらにしろ、今リルにできるのはアル＝ラシードをアズイ・アシークから連れ出すことだけだ。それ以後のことはそれが叶ってから考えても遅くはない。

リルは気を取り直して、アル＝ラシードに別の話題を振ることにした。

アズイ・アシーク 4

「……『巡回』に当たっちゃった、かな」
「……？」

ほどなくアズイ・アシークの最端に辿り着く、という場所で、リルは足を止めた。少し遅れて立ち止まったアル＝ラシードが、リルの言葉の真意が汲み取れずに首を傾げる。

それに何と説明するべきか迷ったリルは、言葉を選んで口を開いた。

「『創国の六葉』って知ってる？」
「『創国の六葉』……？」

記憶を探るように繰り返したアル＝ラシードは、思い当たるものがあつたらしい。少しの間をおいて、「ああ」と頷いた。

「文献で見た記憶がある。古の魔術興国の祖となった、六人の人物のことだったと記憶しているが」

淀みなく答えたアル＝ラシードに、聞いておきながら、リルは内心驚いていた。

『創国の六葉』　　というか、現在アズイ・アシークが在る場所にあつた国については、殆ど記録が残っていないと言っても過言ではない。数少ない文献を『魔法大国』シャラ・シャハルが多く所有しているのは周知の事実であるが、『創国の六葉』についてとなると、名の通り国の成り立ちに関わる内容だ。余程古い文献であるか、

後の世に新たに編纂されたか　どちらにしろかなり希少な知識が
シャラ・シャハルには伝わっているということになる。

認識を改めないといけないかもしれない、と思いつつ、リルはそ
れを表に出すことなく話を続けた。

「そう、その『創国の六葉』なんだけど　彼らが後に結界の要に
なっただって話は知ってる？」

「……結界の、要？　結界とは、今も稼働しているという大規模結
界魔術のことだろうか」

リルが頷くと、アル＝ラシードは難しい顔をした。また濃くなっ
た眉間の皺に、何だか申し訳ないような気分になるリル。

「それは、……人柱という意味以外に解釈しようがないんだが」

「　そういう意味での『要』で合ってるよ、アル＝ラシード。…
…あんまり知られてないとは思うけど……」

『創国の六葉』　建国の立て役者とも言える六人の英雄的人物
は、その身を以て国を護るための結界を為した。

半永久的に展開する大規模魔術のための人柱。そうなることを己
の意思で選んだのか、それとも強要された末のことであつたのかは
今はもう、知る術はない。

ともかくも『創国の六葉』は今も尚、結界の要として機能してい
る。それは効果が反転した今も変わらない。けれど、国が滅びた原
因である禁じられた魔術が、それらに与えた影響については、恐ら
くイスヒヤンデリルの祖国にしか知られていない。

「……ここにあつた国が滅びた原因と関係があるんだろうけど、結

界の魔術がおかしくなってる……。大梓の、『結界を創り出す』っていうのは変わってないんだけど、外からの侵入を拒むものだったのが、反転して内から出さないものになってるし、綻びが増えたのもあって『六要』が現出するようになってるらしいの。兄様たちに聞いただけだから、実際に見たわけじゃないんだけど」

どこまで話してもいいものか　どう話せば不審に思われないか
考えつつ言葉を紡ぐものの、既に手遅れな気がひしひしとする。それでも説明しないわけにはいかないのが悲しいところだった。

「現出……？」

怪訝そうに呟いたアル＝ラシードに、リルが更に言葉を重ねようとした時だった。

ぞわり、と肌が粟立つ。魔力を感知することがほぼできないリルですら感じられる、異様なまでに濃く　そして禍々しさすら覚える魔力の塊が、唐突にそこに現れた。

（見つかったやつたか……。精^{イス}霊石の気配でアル＝ラシードの魔力も隠せるかと思ったけど、契約者がわたしだし、そこまでは無理だよね）

反射的に固まった身体を慎重に動かし、リルはそこに現れた存在に視線を向ける。

ちらりと見えたアル＝ラシードは、魔力に当てられたのか、顔色を失くして硬直していた。それに心配にはなるものの、今は声を掛けられるような状況ではなかった。

現れたそれ《……》が何であるかを、リルは正確に知っていた。

その、名前も。

『 汝に 』

声ならぬ声が空気を震わす。美しい楽の音にも似たそれは、状況さえ違えば聞き惚れるような妙なる響きだった。

ふわり、と『声』の主の衣装の裾が翻る。『彼女』が何者であつたかを雄弁に語る、『舞』のためだけに特化したその出で立ちしゅん、と清廉な鈴の音が鼓膜を震わせる。その音もまた、現実にあるものではない。

両眼を覆うように巻かれた布の存在すら、彼女の美しさを損なつてはいなかった。花の顔を予感させる、整った口元が再び動く。

『 汝に、証ありや？ 』

問う彼女に、『意思』と呼べるものが存在しないことをリルは知っていた。結界の要　そして番人としての役割をなぞることしか、彼女にはできない。

『盲目の舞姫』シルメイア。

『創国の六葉』のひとりであり、のちに禁術の基となる魔術によって、生者とも死者とも呼べない存在　結界の要となった人物。守るべき国が跡形もなく滅びた瞬間から、まるで幽鬼のように結^{アズ}界内に現れるようになったのだと、兄たちから聞いていた。『六葉』それぞれが、一定区域を『巡回』するように動くことがあるということも。

まさか、実際に目にするとは思っていなかったけれど。

少しでも気を抜けば気圧されるような、威圧感さえ覚える濃密な魔力。それは彼女が^{シルメイア}肉体を持たない代わりに、魔力によって身体を形作っているからだ。

その在り方は、^{イサー}精霊を真似てはいるものの、似て非なるものではない。与えられた役割 『命令』と言い換えてもいい 以外、何をすることもできない、しようと『思う』こともない、人形のよ
うな存在。

^{イース}精霊が淡く明滅するのが視界に入る。焔が心配しているのだとわかって、少しだけリルは笑った。そして『シルメイア』を真正面から見据える。

掛けられた問いに返す言葉は、決まっていた。

「証は、ありません。あなたが創った、あなたが守りたかった国は滅びました。……それなのに、未だに役目に縛り付けたままでごめんなさい」

届かない言葉だと知っていても、言わずにはいられなかった。

兄達の中で、唯一現出した『六葉』と顔を合わせたことのあるザードも、遭遇する度に無駄だと知りつつも謝罪するのだと苦い笑みで言っていたのを思い出す。だからさっさと結界を解除する方法見つけなよ、とシーズをせつついていたのも。

全て諸共に滅びたのなら、『創国の六葉』が人柱となったままであることもなかっただろう。けれど、現実には彼らは未だに『要』のまま そして、魔術に関する知識の大半が失われた後に彼らを解放するには、長い長い時間が必要だった。

自由に結界を出入りすることができるのは、滅びた大国の血を引く。その『証』たる魔力を持つている者だけだ。

リルには『魔力因子』がないため魔力そのものがないし、そもそも魔力があっても『証』と認めてはもらえない。質の異なる魔力を、『シルメイア』が気付かないはずがないのだから。アル＝ラシードの魔力も同様で、だからこそリルが取れる選択肢は一つしかなかった。

『シルメイア』から目を逸らさないまま、アル＝ラシードに近づく。硬直状態からはなんとか脱却したらしく、リルの行動を窺っているのが気配でわかった。

『シルメイア』は未だ動かない。『焰』の存在が『シルメイア』の行動を阻害しているのだろうと気付いて、リルは迷いを振り捨て、叫んだ。

「走って！」

同時にアル＝ラシードの背を押す。殆ど突き飛ばすような形になったけれど、そこまで気遣ってられる余裕はなかった。

無理やり走らされる形になったアル＝ラシードが、リルがその場に留まっていることに気付いて足を止めようとするのに、もう一度叫ぶ。

「わたしのことは気にしないでいいから！ そのまま走って！！すぐ追いかけるから！」

一瞬迷うような素振りを見せたアル＝ラシードだったが、リルを気にする様子を見せつつも、速度をゆるめることなく走っていく。それを見届けて、リルは『シルメイア』に視線を戻し、精霊石に触

れた。定められた通りに指先で叩き、思念で以て呼びかける。

（ イース・ナルルⅡ【焰】、出てきて）

全て伝えきる前に精霊石が明滅し、瞬く間に宙に炎が広がる。一瞬で現れた焰は、どこか複雑そうな顔をしていた。

「……お願いね」

そうリルが言えば、心底気の進まなさそうな声で「了解」と答える。リルは苦笑して、それから腰元に提げていた短剣を手を取った。鞘から引き抜くと、刀身がきらりと月光を反射する。

リルはそれを短剣を持つのと逆の腕に当て 躊躇いなく、引いた。

刃の軌跡を、痛みというよりも熱さが走り、そして鮮やかな赤が流れ出る。傷口から溢れ出た血を指先で掬い、リルは素早く砂地に呪印を刻んだ。

『内的魔力』のないリルには、魔法も魔術も使えない。『魔力因子』と『発現因子』、両方を持つていなければ、『内的魔力』は持ち得ない。それはつまり、魔力によって何かを為すことができないということだ。

けれど、それに抜け道があるということをリルは知っている。

『発現因子』、『魔力因子』、どちらか一方のみでは魔力によって何か事象を起こすことができないのは確かだが、魔法や魔術で形作られたものや事象になれば干渉できるのだ。

本来、リルがシーズに教えてもらった方法は、もう少し穏便なものだった。しかし、今の状況で時間をかけてそれを為すことはできない。

出来る限り迅速に場を乱し、崩し、一時だけでも『結界』を消失させるためには、己の血を使うのが最も適していた。だからこそ、リルは迷うことなくそれを選んだ。

……兄たちに知られたらどんな反応をされるのか分かっているから、リルとしてはできるだけ選びたくはなかった選択肢だったのだが、『六葉』に遭遇してしまったならば仕方ない。『証』がない『侵入者』と見做されれば、どう考えても穏便に別れることなどできないのだから。

呪印が淡く光る。現在ではほぼ失われたと言われる古の魔術言語
それによって紡がれた呪が力を持つ。

リルは『発現因子』を持っているから、自ら事象を起こすことは
できなくとも、今在る事象に干渉することはできる。

そう、『シルメイア』という魔術的な『要』に干渉すること
だつて。

『
』

声なき声が悲鳴に似た響きを奏でる。ごめんなさい、とリルは心
の奥で呟いた。

苦しげに身を振る『シルメイア』の姿が歪む。

『シルメイア』が現出できるのは、結界を形作る魔術の中に、『
六葉』の肉体から『内的魔力』を自動生成する術式が組み込まれて
いるからだ。見えない系で『要』たる肉体と繋がった『シルメイア』
は、ほんの少しその系に干渉するだけで、仮初の身体を保てなくな
る。

死ぬわけではない。何故なら『シルメイア』は生きていないから。
消滅するわけでもない。結界の魔術が解除されない限り、『六葉』
は『要』として在り続けるのだから。

それでも心が痛むのは、『彼女』はただ役割を果たそうとしただ
けだと知っているからだろう。

『侵入者』として『排除』されるわけにはいけないけれど、リル自身は未だ害を与えられたわけではない。自分一人なら 自分と焰だけだったなら、こちらから手を出さずに逃げ出すことも考えた。そもそも、リル一人であれば、『六葉』に存在を気付かれる可能性はゼロに等しく、現出した『六葉』に会うこともなかっただろうが。

けれど実際にはリルは一人じゃなかったし、先行させたアル＝ラシードと共に逃げていたとして、足止め無しに『シルメイア』から無事に逃げ出せたかという点、それは恐らく無理だっただろう。どちらにしろ、もしもの話には意味がない。

くらり、と視界が傾いた。ふらついた身体を焰が支えてくれる。苦笑して礼を言おうとしたリルだったが、きちんと言葉になったのかも自分では分からなかった。視界が奪われ、音も、触れる感覚も遠くなる。

流れた以上の血が失われていくのを感じる。正確には、血ではなく『発現因子』なのだが。

焰が慎重に、呪印に魔力を注ぐ気配がする。思うようにならない身体がもどかしく、けれど、自分にはどうしようもないということもリルには分かっていた。

意識を失えば楽なのだろうけれど、呪印が作動している間はそうはいかない。ひたすら耐えるしかなかった。

そうして、どれほど経っただろうか。

ふ、と体内から何かが失われる感覚が消えた。同時に、ほんの少し身体に注がれた魔力にリルは気付く。傷を癒

すためと　それから。

(……焰?)

声にならない疑問を感じ取ったのだろう。焰の手が少し乱暴にリルの目を塞ぐ。

「　負担が掛かり過ぎた。眠りな、姫さん。じゃないと回復が追いつかない」

でも、と紡ぎかけた言葉は音にならず、焰によってもたらされた眠気が、ただでさえギリギリの淵で踏みとどまっていたリルの意識を沈めようとする。

抗うことのできないそれに導かれ、リルは眠りに落ちた。

【禁智帯】の外

目を覚ましたリルは、焰に担がれている自分を知覚して、次いで同じように反対側の肩に担がれるアル＝ラシードに気付いた。

「目、覚めたか。姫さん」

気配で気付いたのだろう焰が声を掛けてくる。ひとまず地面に降りてくれるようにリルが頼むと、焰は快くそれを了承した。

安定した大地に足を下ろし、周囲を観察する。視界のどこにも砂丘はない。地面は草地で、空に輝くのは上弦の月。無事にアズイ・アシークから出ることができたのだと、周りの景色が雄弁に語る。

それは歓迎すべきことであり、喜びこそすれ疑問を持つこともなかったのだが。

「……えーと、焰。運んでくれてありがとう。あと傷も完治させてくれてありがとう。それで、アル＝ラシードはなんで気絶してるの？」

無理やりに魔術に干渉したことによる体調不良は既に無い。『発現因子』の豊富さだけならば並みの魔術師や魔法士にも匹敵するとシーズに言われたリルだ。回復の早さも折紙つきである。

しかし、危険な目に遭わないように　そして見られないために先に行かせたアル＝ラシードが意識を失っているのはどういうことだろう。

あの区域に現れる『六葉』は『シルメイア』だけのはずだし、アズイ・アシック内に他に異変はなかったはずだ。もちろん転んだりぶつかったりして意識を失うようなものもない　とザードには聞いていたのだが。

リルの問いに、焰は「さあ？」と軽い調子で首を傾げた。

「俺もよくわかんねんだよな。姫さん担いでアル＝ラシード追いかけたら、アズイ・アシック出た辺りで倒れてて。一応診てみたけど、特に外傷もないし。アズイ・アシックから出たせいっぽいかなーとは思っただけど」

「アズイ・アシックから出たせい？」

「倒れてた場所と残ってた痕跡からの推測だけど。アズイ・アシックから出たところで一回倒れてる　つつーか膝着いたっぽいんだよな、アル＝ラシード。で、そこから足引きずるみたいにふらふら歩いて、ちよっと思ったところで本格的に倒れた感じの跡が残ってた」

焰の言葉にリルは考え込む。状況は分かっても、アル＝ラシードが倒れた原因はそれからさっぱりわからない。そんなリルに、焰は続けて言った。

「で、これも多分なんだけど。これって『魔力酔い』に似てね？」

「……『魔力酔い』って、あの『魔力酔い』だよな？」

「姫さんも何回かなったろ。まあ、姫さんのは普通の『魔力酔い』とは違うけどさ」

『魔力酔い』とは、一般的に『外的魔力』の濃度の差異によって起こるものだ。『魔力酔い』を起こすほど濃度の差がある土地はそうそうないが、例えば大規模な魔法や魔術を使っための下準備の段階で、人工的にそれが作られることはある。

他の場所からそこへ足を踏み入れることで、通常よりも濃い『外的魔力』に、あたかも酒に酔うように酩酊するのだ。

【禁智帯】であるアズイ・アシークには『外的魔力』が無い。しかし、アル＝ラシードのような、『魔法大国』シャラ・シャハルで育った者にとつては、密度の濃い『外的魔力』はなくてはならないものだろう。そこにあるのが当然、無いことなど考えられない、というような。

つまりアズイ・アシークに入った時点で、『外的魔力』が全く無いという異常な環境　あくまで当人にとつてだが　によつて、『魔力酔い』の逆の現象が起こることは考えられる。『外的魔力』を感じ取る能力の強い者であれば尚のこと。

しかし、目を覚ましてからのアル＝ラシードにはその様子が見られなかった。だからリルもその可能性を思いつかなかったのだが。

「……もしかして、『加護』のせい？」

「ん？」

「アル＝ラシードは、『加護印』^{シャーン}が自分を護るって言ってたよね。その『加護』によつて、アル＝ラシードの身体が【禁智帯】の環境に慣らされていたってことはない？」

アル＝ラシードの身体が【禁智帯】の環境　『外的魔力』が無い環境　に【加護印』^{シャーン}によつて強制的に適応させられていたのなら、アズイ・アシークを出た途端に本来の意味での『魔力酔い』を起こすことは十分考えられる。……何故そこでは『加護』が現れなかったのかは謎だが。

「あー……言われてみりゃ、そうかもな。シャラ・シャハル王家の

人間が、アズイ・アシークでああやって普通に活動できてたのが不思議なんだし。いくら昔より魔力の強さの平均が変わってるからって言うても、魔力血統に連なる奴が平然としてるはずないよな。…『内的魔力』が発現してないならともかく」

「アル＝ラシードの話だと、そういう人も今は居ないみたいだし。そもそもアル＝ラシードは『加護』があるからか、結構魔力強いよね？」

「逆じゃね？ 『加護』が現れるのって魔力が飛び抜けて強い奴っぽいし」

何気なく焰が言った内容に、リルは「え？」と目を瞬いた。

「アル＝ラシードって、魔力強いのか？ ……えっと、シャラ・シャハル王家の人間だし、強いのは強いんだろうけど、そんな感じしないよ？」

「そりゃそうだろ。『加護』　　っつーか【加護印】^{シャーン}か。そっちに魔力の大半が流れてる。多分人間に感知できる魔力自体はそんな多くないな」

^{イサー}精霊が魔力に関することを読み違えることはほぼ無い。その^{イサー}精霊である焰の見立てが間違っているとはリルは思わない。

けれど、【加護印】^{シャーン}に魔力が流れ込み、それによってアル＝ラシードの魔力の大半が外に感知できないということとは。

「【加護印】^{シャーン}って、魔術とか魔法だったの？」

精霊の加護が顕れたものだという言い伝えは、間違いだったのだろうか。

そう思っのりルの言葉に、焰は軽く首を振って否定した。

「んにゃ？ 似てるけど違うな、これ。むしろ精霊^{イサー}が使うのに近い。あえて言うなら、『祈り』とか『願い』だな。子孫が幸せに生きられますように、ってか」

「……それは、初代の？」

「初代の親だろ。あと、もうちょい弱いのが重ね掛けしてる感じ？これが初代に宿ってた方かもな。精霊^{イサー}が力揮うのって考えるだけでいいからな。呪いになる勢いで願ったから、本体がいなくなっても続いてる。迫害を受けないようにってのもあったんだろ。

多分、【加護印^{シャーン}】持ちは先祖返りだ。飛び抜けた魔力は本人も周りも不幸にする。目に見えて違いがある方が、感覚で異端って分かるよりいいと思っただかね？」

正直どっちもどっちじゃないかと思うけどな、と締めくくって、焰はアル＝ラシードを抱えなおす。肩に担いでいたのを後ろに背負う形に。

「まー、こうやって話しててもアル＝ラシードが目エ覚まさないなら答え合わせの仕様がなし、っつーか本人だつて多分わかんねえだろうし。姫さんがどーしても気になるってんならアル＝ラシードが目エ覚ましてから色々聞きたいだろ。とりあえずとっとと国境まで行こうぜ？」

そう言われればそうだ。そもそもリル程度の知識と能力では、『魔力酔い』か否かすら満足に判別できないだろう。目を覚ましたアル＝ラシードの身体に不調やそれ以外の異変が残らないことを祈るくらいしか、今はできない。

気持ちを切り替えて、リルは焰の隣に並んで歩き出す。格段に歩きやすくなった地面に、進むペースも早まっている。これなら夜が明ける前に国境まで辿り着けるだろう、と思つて、それ以降の行動

についてもぼんやり考えてみる。

（とりあえず、アル＝ラシードには国境に着くちょっと前には目を覚ましてもらわないと困るな……ずっと焔を実体化させておくのはまずいし）

残存する魔力量については心配していないが、それ以外の問題がある。

いつ目が覚めるだろう、と固く目を閉じるアル＝ラシードの顔を眺めて、リルは僅かに眉根を寄せた。……それに目敏く気付いた焔に乱暴に頭を撫でられて、それはすぐに消え去ったが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3773x/>

古国の末姫と加護持ちの王

2011年11月21日06時50分発行